

第6室(書跡)

「日本の古経典」展示解説

N-10 称讃浄土仏撰受経 (しょうさんじょうどぶつしょうじゅきょう)

この経典は唐・玄奘(げんじょう)の訳になり、極楽浄土(ごくらくじょうど)の仏菩薩ならびに国土の勝妙をたたえ、諸仏をほめたたえたことを説いたもので、鳩摩羅什(くまらじゅう)訳の『仏説阿弥陀経』の異訳本です。黄麻紙九枚を継ぎ合わせ、楷書体(かいしょたい)で書写していて、いかにも天平写経の風情を示しています。

N-14 仏名経 (ぶつみょうきょう)

『仏名経』は過去のあやまちを悔い改め、念仏の力で罪を滅ぼすために、諸仏の名号を受け入れて覚えておくことを説いた経典です。この仏名経は過去、現在、未来の3巻に構成され、それぞれ千の仏名をあげています。各巻の奥書により、永治元年(1141)に五師隆慶(ごしりゅうけい)が先師・林幸大師(りんこうたいし)の一周忌を供養し、同時に仏名会(ぶつみょうえ)を催して、この経を施入したことがわかります。

第6室

染織—玉帯残欠と様々な技法の染織品—

今回の染織は、聖武天皇の遺品と伝えられる玉帯残欠を中心として、組紐や綾・平絹・氈といったさまざまな技法の染織品を展示しました。織成技術や染め色の違いなど、古代染織の豊かな世界をご覧いただければと思います。

N-49 玉帯残欠（ぎょくたいざんけつ）

[重要文化財] 奈良時代・8世紀

多彩な色系を濃い色から淡い色へとぼかして配列し、襷文を表わした帯。聖武天皇の玉帯として伝来しました。注目すべきは、さまざまな色のガラス玉と真珠玉を組み糸に通している点です。これは正倉院宝物にもみられない大変珍しいもので、高貴な人物が身に着けたと考えられます。

N-50-1 山形文組紐幡頭（やまがたもんくみひもばんとい）

[重要文化財] 飛鳥～奈良時代・7～8世紀

仏教儀礼で用いる幡（ばん）という旗の残欠です。上部の幡頭（ばんとう）は組紐でできしており、数々の色系を用いて山形文（または矢羽文）を表わしています。同様の文様は、御物の「聖徳太子二王子像」における太子の腰帯にも認められます。

I-336-3a 茶地蝶文描繪平絹「東院」銘（ちゃじちょうもんかきえへいけん とういんめい）

奈良時代・8世紀

茶地平絹に墨の描繪を施した残欠。翅を広げた蝶の姿を真上と横から表わしています。「東院」（夢殿で有名な法隆寺の上宮王院のこと）という墨書があり、中央の折れ跡から、もとは帯のような形状であったことが分かります。

I-336-4 黄地小円花文金銀摺繪羅（きじしょうえんかもんきんぎんすりえら）

奈良時代・8世紀

細やかに斜め格子状の襷文（たすきもん）を織り出した羅（黄地襷文羅）に金泥・銀泥を用いて六弁の小円花文を摺りあらわしています。残欠ながら、かわいらしい印象を伝える作

品です。

I-336-87 雑色横縞裂（ざっしょくよこじまぎれ）

奈良時代・8世紀

細い横縞の帯と、一見、緋(かすり)風にみえる縞を交互に連続して表わした残決。経糸はかなり細く、緯位とには異なる2色の糸を撚り合わせて1本の糸にした、いわゆる杓糸(もくいと)が用いられています。中央に折り目が残されており、献納宝物のなかには同様の織物を幡の縁として使用した例があります。

I-336-93 縞地竜文刺繍（しまじりゅうもんししゅう）

飛鳥時代・7世紀

色糸を用いて平絹の台裂を横段に色分けし、竜の文様を返し繡で表わしています。細身でありつつ、比較的短躯な竜が四本足で立つ様は、古墳時代の金工作品にみられる文様と類似性が強く、有名な天寿国繡帳とならんで、わが国でも最古級の作品と考えられます。

I-336-102 繡仏裂（しゅうぶつぎれ）

飛鳥時代・7世紀

経糸・緯糸ともに強い撚りを掛けて織られた緞(しじら)を下地として、天人と宝珠文を刺繍で表わしています。継ぎ針繡という両面刺繍の技法が用いられており、もとは献納宝物中の灌頂幡、または金銅小幡に付属する幡足であったと考えられます。

I-336-108 白地花文氈（しろじはなもんせん）

奈良時代・8世紀

氈とは羊毛を圧縮して作られた敷物のことで、現代のフェルトにあたります。本作は白地の氈に藍と縹、赤、淡赤に染めた色氈を嵌め込んで花の文様が表わされています。いわゆる花氈と呼ばれるもので、正倉院には幾種類もの作例が伝えられていますが、法隆寺伝来の花氈は本作のみであり、とても貴重な作例です。

N-319-14 平絹・綾幡足残欠（へいけん・あやばんそくざんけつ）

飛鳥～奈良時代・7～8世紀

幡身の縁下端と4条の幡足をのこした残欠です。1条のみ連珠円文をあらわした赤紫地綾

が用いられていますが、他は各色の平絹で仕立てられています。基本的には五色を意識したものと考えられ、非常に鮮やかな幡の姿を想像することができます。

N-319-34 平絹幡残欠（へいけんばんざんけつ）

飛鳥～奈良時代・7～8世紀

幡頭および幡身の下端と幡足の付け根が残された残欠です。黄色い幡はとくに「命過幡」（みょうかばん・めいかばん）と呼ばれ、死者の魂が無事に成仏するよう追善の供養として用いられました。

綾の幡足

N-319-47-2 黄地山形文綾幡足残欠（きじやまがたもんあやばんそくざんけつ）

N-319-115 黄地変り鬘文綾幡足残欠（きじかわいしだたみもんあやばんそくざんけつ）

N-319-117-1 赤地鬘文綾幡足残欠（あかじいしだたみもんあやばんそくざんけつ）

すべて飛鳥～奈良時代・7～8世紀

法隆寺に伝来した幡には綾という絹織物を用いた例が多くみられます。綾とは直交する経・緯の糸が他方の織糸を一定の法則で連続的にまたぐことで、文様を表わしたものです。法隆寺の綾は時代が進むにしたがって、山形文や入子菱文といった幾何学的な文様から、葡萄唐草文や鳳凰文といった具象的な文様に変化しており、またこの変化に従って文様も大柄になる傾向があります。単色の織物であるため、一見無地のようですが、見る角度を変えると文様が浮かび上がってきますのでお試しください。

平絹の幡足

N-319-51-2 紺地平絹幡足残欠（こんじへいけんばんそくざんけつ）

N-319-52-2 淡縹地平絹幡足残欠（うすはなだじへいけんばんそくざんけつ）

すべて飛鳥～奈良時代・7～8世紀

平絹は経・緯の糸が一越ずつ順番に交差した最も単純な織物で、幡足にも多く使用されました。染め色としては、死者の追善供養を目的として作られた「命過幡」（みょうかばん・めいかばん）が黄色一色であるのに対し、その他の仏事において堂内を荘厳した幡にはさまざまな色が用いられています。紺・赤・黄・緑・紫の五色がその基本であり、染め方の濃淡によってさまざまな表情を見せています。一見単純そうに見えて奥深い染物の世界を教えてください。